Alphons Mucha Museum News

堺市立文化館 アルフォンス・ミュシャ館

アルフォンス・ミュシャ
黄道十二宮
1896年
リトグラフ、紙

Contents

vol. 1

展示報告（2011年3月 — 2012年3月）
イベントレポート
作品紹介
作品修復報告
学芸員コラム vol.1
ミュシャ館インフォメーション

アルフォンス・ミュシャ
レスリー・カーター
1908年
リトグラフ、紙

きれいなミュシャ、怖いミュシャ

2011年3月26日（土）—7月10日（日）

19世紀末、ミュシャは、アール・ヌーヴォーの寵児として一世を風靡しました。植物に着想を得た優美な曲線と華やかな装飾に満ちた作品は、今も人々を引き付けて止みません。しかしよく見ると少し怖いものもあります。この時代の文学や絵画、彫刻等の諸芸術には、人間の精神や夢といった内面的なものや人知を超えたものを表現しようとする傾向がありました。このような目に見えないものを探求する性格は、新世紀への期待と社会が変わることへの不安が反映されたものといえます。ミュシャもまた精緻な装飾で彩られた「きれい」なモティーフと、神秘的、霊的な「怖い」モティーフを作品に象徴的に表現していました。美しくも狂気を感じさせる女性像や不気味な装飾は、こうした関心によるのかもしれません。本展では、「怖い女」「美しい女」「見えないものへの探求」「〈きれい〉なモティーフ・〈怖い〉モティーフ」という4つのコーナーを通じ、同時代の芸術傾向を踏まえながら84点の作品を展示しました。

「怖い」にも様々な種類がありますが、まず取り上げたのは運命の女・魔性の女であるファム・ファタルです。これは女性の権利拡張が叫ばれ始めたこの時代、男性の地位を脅かす新しい女性像への屈折した嫌悪と幻想的な理想像が可視化されたもので、世紀末芸術に流行した主題でした。ミュシャが描いた代表的なファム・ファタルとして《レスリー・カーター》や《メディア》が挙げられます。いずれも狂気を孕んだ女性の姿を効果的に描いた演劇ポスターです。対象的に「美しい女」では無邪気で穏やかな女性が描かれた作品を集めました。女性はミュシャが得意とした主題ですが息子によれば彼は女性嫌悪者であったといい、こうした女性像は一種の理想化であったとも考えられます。

ミュシャは商業デザイナーであると同時に、人知を超えた目に見えない存在と、それに対峙した人間の姿を幻想的、神秘的に描く画家でもありました。「見えないものへの探求」では、『主の祈り』などの作品を通じ象徴主義や世紀末芸術との関連を例示しました。心霊研究に没頭し、実はフリーメーソンのメンバーであったミュシャ。彼の作品の「怖さ」は神秘主義への傾倒によるものなのかもしれません。降霊術等で得られた心霊研究の結果は作品制作の資料にされたと指摘されていることから、書籍『サンチマン—音楽と身振り—』より、《メディア》と表情の表現が類似しているミュシャ撮影の写真も紹介しました。

最後のコーナーでは、作品の細部に隠されたモティーフに注目しました。例えばミュシャは女性に華を添えるようによく鳥を描いていますが、作品の雰囲気に合せ愛らしくデフォルメすることもありました。手や目も、何かを強調する目的やそれ自体の造形の面白さからしばしば装飾として用いられていますが、フリーメーソンのメンバーであったミュシャにとって、そのシンボルとされる目のマークを使うこと自体何か象徴的な意味があったとも考えられます。

一度気が付くと目が離せなくなる、きれいだけれど怖い、かわいいけれど不気味な作品を集め、「きれい」「怖い」という2つの視点から、ただ美しいだけではないミュシャの魅力に迫りました。（S.S.）

ミュシャの装い

2011年7月16日（土）—11月13日（日）

ミュシャは女性の装いに多様な要素を描き入れ、独自のスタイルを確立しました。特に、パリで活躍した頃に多く描かれたしなやかな線の装飾に囲まれた女性像は、アール・ヌーヴォーのアイコンとして知られています。本展では、彼の描いた女性の衣服や宝飾品に注目し「遠い世界への憧れ」「宝飾品のデザイン」「独創的なスタイル」「流行とミュシャ」と題した4つのコーナーで84点の作品を紹介しました。

1871年にフランスの敗戦で幕を閉じた普仏戦争以降、第一次世界大戦が勃発する1914年までの間、ヨーロッパはベル・エポックと呼ばれる泰平を謳歌しました。国力を回復したフランスでは1880年代頃には国民経済にも余裕が生まれ、芸術の分野においてはアール・ヌーヴォーのような華やかな様式が花開きます。「アール・ヌーヴォー博」とも呼ばれた1900年の第5回パリ万国博覧会は、第1次世界大戦以前にフランスで行われた万博のうち最も成功した世紀のイベントでした。大衆は各国の出品物に心を躍らせ、まだ見ぬ異国や過去の世界への幻想や憧れを抱きました。古代の女神を思わせる衣服、オリエンタルな雰囲気に満ち圧倒的な存在感を持つ華麗な宝飾品。ビザンティン風の作品を描く契機となった《ジスモンダ》以来、ミュシャは歴史的、異国的モティーフを作品に採り入れることで人々の心を掴むことに成功します。

やがて絵のなかの女性がまとう宝飾品はデザインを提供す

アルフォンス・ミュシャ
羽根
1899年
リトグラフ、紙

る目的でも描かれるようになりました。《蛇のブレスレットと指輪》は具現化した好例といえ、ミュシャがポスターに描いた蛇の飾りを気に入った女優サラ・ベルナール（1844-1923）が、宝飾家ジョルジュ・フーケ（1862-1957）に制作を依頼したものです。

今日、アール・ヌーヴォーの代表的な画家とされるミュシャですが、彼自身はそれを認めず「自分のやり方でやった」と述べていました。これは、多様なモティーフを当時の流行の装いと共にアール・ヌーヴォーのしなやかな曲線で絡め取り、独自のセンスで巧みに折衷したのだという自負の表れだったのかもしれません。いわゆる「ミュシャ・スタイル」と呼ばれる幻想的な装いの女性像は、普遍的な憧れの対象として大衆に受け入れられましたが、目的によっては現実的な衣服を描くこともありました。

本展では最後に「ミュシャ・スタイル」とは異なるこうした作品にも注目しました。ミュシャは製菓会社ルフェーヴル=ユティルのビスケット・ラベルやポスターに、腰をコルセットで締め上げる当時流行のS字型シルエットのドレスを着た女性を描いています。これは、商品が洗練された紳士淑女のためのものであることをアピールしたいというメーカーの希望に応えるために描かれた装いでした。一見全くの想像で描かれたような絵のなかに当時の流行を思わせる装いが採り入れられ、独創的でありながら現実離れし過ぎなかった点も彼の人気の秘密なのかもしれません。（S.S.）

ミュシャと祖国チェコ

2011年11月19日（土）—2012年3月11日（日）

企画展「ミュシャと祖国チェコ」では、ミュシャが晩年に活動の拠点を移したチェコで制作された作品を中心に、ミュシャとチェコの関係を紹介しました。

芸術を通して祖国に貢献したいと若い頃から願っていたミュシャは、スラヴ民族の歴史を描いた《スラヴ叙事詩》を制作するために生まれ故郷であるチェコへと活動の拠点を移しました。この作品を制作する傍ら、ミュシャは様々な活動を通して祖国に貢献します。本展では、ミュシャの活動を3つの章に分け、77点の作品を展示しました。

第1章「祖国のために」ではポスターや紙幣、壁画の習作などを、晩年のライフワークであった《スラヴ叙事詩》に関する素描や油彩画と共に展示し、祖国の為に尽力した功績を紹介しました。フランスで活躍していた頃の作品に見られる華やかで繊細な雰囲気とは異なり、力強いメッセージ性のあるチェコで制作された作品からは、ミュシャの新たな一面を見ることが出来ます。

第2章「素描、油彩画」では、チェコの偉人や家族をモデルにした素描や油彩作品を展示しました。下絵やデザイン画は、細部まで緻密に描き込まれており、ミュシャが構想段階から確固たる信念を持って制作に励んでいたことが伺えます。晩年になってから本格的に取り組み始めた油彩には、苦労の跡を垣間見ることができ、チェコの偉人や伝説をモティーフとして制作された作品は、ミュシャが祖国の歴史や文化を常に意識していたことがよく分かります。

第3章「ミュシャと民族衣装」では、ミュシャが描いたチェコの民族衣装にスポットを当てて紹介しました。民族衣装はその国の歴史や文化を反映し、その土地の気候風土の中で長年にわたって培われてきた人々の感性の結晶が表現されている

アルフォンス・ミュシャ
《スラヴ叙事詩》展
1928年
リトグラフ、紙

アルフォンス・ミュシャ
『装飾人物集』図6
1905年
リトグラフ、紙（書籍）

と言えます。そうした民族衣装から着想を得たと思われるモティーフを、ミュシャはフランスで活躍していた頃から作品に取り入れていました。ミュシャの育ったモラヴィア地方の民族衣装は、草花の模様の刺繍をふんだんに施した色鮮やかなものが特に多く、作品にもその影響を見ることができます。なかでも『装飾人物集』に収録された40プレートのうち、約4分の1には民族衣装に着想を得たと思われる衣装を身に着けた人物が描かれており、ミュシャの関心の高さが窺えます。

華やかな作品の背景にはいつも祖国を想う気持ちがあり、晩年には芸術を通して祖国に貢献したいという強い気持ちを持って制作に励んだミュシャ。そこには愛国心とチェコ民族の自由を願う想いが反映されています。本展では、華やかで美しいだけでは無い、ミュシャの一味違った魅力を紹介しました。（M.S.）

当館では、ワークショップやコンサート、講演会など年に2回、企画展に関連したイベントを開催しています。2011年度はこんなイベントを開催しました。

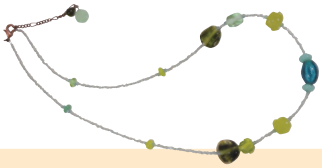
“ミュシャの世界でアクセサリーを作ろう！”

2011年8月20日（土）13:00～15:00

企画展「ミュシャの装い」に合わせ、アクセサリーを作るワークショップを実施しました。ミュシャの作品をヒントにガラスパーツを選んでアクセサリーを作り、ミュシャの色彩感覚やミュシャらしさとは何か、を考えることを目的としました。講師にはガラス作家・valeria氏をお迎えしました。使用するパーツは、泉州産のガラスを使用した講師の手作りのガラスパーツを用いて、堺のある泉州という地域についても理解を深めました。

valeria講師にアドバイスをいただきながら、参加者同士でアイディアを出し合うなど、和気藹々とした雰囲気で、世界に一つのオリジナルアクセサリーを作ることが出来ました。

valeria氏



参加したお客様からは「たくさんの種類のガラスから選べる所が本当に自分のオリジナルになってよかったです。」「デザインを考えるのは難しかったけど楽しめました。」といった声をいただきました。アクセサリー作りのワークショップは初めて開催しましたが、制作を通してミュシャファンの交流の輪も広がり、お客様にも満足していただけたイベントになりました。（M.S.）

“第2回 シルクスクリーンに挑戦！”

2012年1月29日（日）13:00～15:00

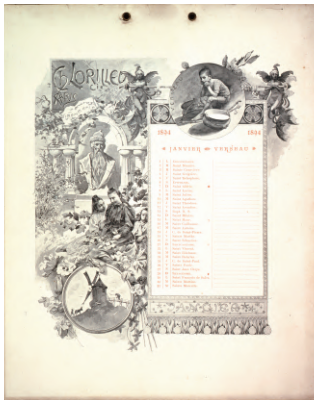
2010年に開催したワークショップ「シルクスクリーンに挑戦!」の再開催を望む声にお応えし、シルクスクリーンでミニ・トートバッグを作るワークショップを開催しました。今回のテーマは企画展「ミュシャと祖国チェコ」に合わせ、チェコの民族衣装の模様でした。ミュシャの作品にはチェコの民族衣装を着た少女や、民族衣装から着想を得たと考えられるモティーフがよく描かれています。ミュシャが描いた民族衣装や、民族衣装の図案集などを見ながら絵柄を考えました。

終了後には、「ミュシャの作品がより身近に感じることが出来るとっても楽しい体験となりました。」「シルクスクリーンは初めてでしたが、とても楽しく作品を作ることが出来ました。」といった声をいただきました。ミュシャの作品への理解を深めると同時に、印刷技法にも興味を持っていただけたイベントになりました。（M.S.）

堺市では約460点のミュシャ作品を所蔵しています。企画展で展示された作品や人気作品などをピックアップしてご紹介します。

カレンダー 1894年1月：Ch.ロリュー社

1894年 紙に印刷 321×253 mm



本作はインク会社ロリュー社のために制作された全12点のカレンダー。ミュシャが《ジスモンダ》のポスターで成功を収める以前に手掛けた仕事である。

向かって右側には、装飾された枠の下部に月の名前が記入され、上部の円の中にはその月の星座の絵が描かれている。左上部には、社名が飾り文字で配されている。下部に描かれている風車はロリュー社のトレードマークであり、一枚一枚が異なったデザインである。カレンダーに描かれた子供たちは、ロリュー家の子供たちがモデルとなっている。

写実的に描かれた部分と装飾部分が見事な調和を成しており、ミュシャが優れた画力とデザインセンスを持っていたことを物語っている。（M.S.）

ヤン・アーモス・コメンスキー：プラハ市民会館市長ホール壁画〈下絵〉

1910年 油彩、カンヴァス 420×315 mm

チェコのプラハにある市民会館の市長ホールに8枚あるペンデンティヴのうちの一つ《ヤン・アーモス・コメンスキー》の習作。つたのような植物が描かれている下部は、完成作では「忠誠」を表す文句が書かれている。コメンスキーや背後の女性は、完成作とほぼ同じポーズで描かれており、習作段階から全体のイメージは固まっていたと考えられる。

ヤン・アーモス・コメンスキーはチェコを代表する思想家の一人で、教育学者としても有名である。チェコの宗教改革で生まれた「兄弟教団」最後の司祭で、優れた教科書や教育書を書き、後のチェコの思想家たちに影響を与えた。チェコの初代大統領マサリクも影響を受けた一人である。（M.S.）

黄道十二宮 1896年 リトグラフ、紙 767×581 mm
黄道十二宮〈下絵〉1896年 墨、紙 703×542 mm

本作の絵柄は、印刷会社シャンプノワ社の販売促進用のカレンダーのために作られた。細部まで綿密に描かれた絵が多くの企業の目にとまり、本作のような装飾パネルやポストカードにも転用された。

細かな装飾の施された髪飾りを着けた横顔の女性が円形の中に配されている。背後の星座は、それぞれエジプト風のモティーフで描かれている。円形を配したうねる髪の女性は、ミュシャ・スタイルとして当時人気を博した。

堺市では本作の下絵も所蔵している。画面上部の草木が描かれている部分は、下絵の段階では女性が描かれていたことが分かる。（M.S.）

2010年度

作品名	制作年	技法・材質	修復後寸法（タテ×ヨコ）	処置内容	委託先
ヤン・ネポムツキー像のある静物	1932	油彩、カンヴァス	505×415	画面及び裏面の洗浄、剥落部分の接着、破部分の繕い、欠損部の充填補彩、一部釘の取り替え、作品固定、既存額縁にアクリルと裏板を装着	山領絵画修復工房
ハムレット	1899	リトグラフ、紙	2079×755	画面及び裏面の洗浄、裏打ちの除去、変形修正、裏打ち及び作品固定、額・アクリル・パネル新調	山領絵画修復工房
ブルネット：ビザンティン風の頭部	1897	リトグラフ、紙	600×442	画面及び裏面の洗浄、裏打ちの除去、変形修正、裏打ち、額・アクリル・マット新調（2011年度）	山領絵画修復工房
ブロンド：ビザンティン風の頭部	1897	リトグラフ、紙	604×440	画面及び裏面の洗浄、裏打ちの除去、変形修正、裏打ち、額・アクリル・マット新調（2011年度）	山領絵画修復工房

2011年度（前半）

作品名	制作年	技法・材質	修復後寸法（タテ×ヨコ）	処置内容	委託先
ジスモンダ	1895	リトグラフ、紙	2183×753	画面及び裏面の洗浄、裏打ちの除去、変形修正、裏打ち及び作品固定、額・アクリル・パネル新調	山領絵画修復工房
スラヴの民族衣装を着た少女：《スラヴ叙事詩》の習作	1919	油彩、板	500×500	画面及び裏面の洗浄、亀裂部分の接着・充填・補彩、作品固定、アクリルボックスを新調し既存額縁ごと封入	山領絵画修復工房

※作品寸法の単位はmm。

学芸員コラム vol.1

《メディア》と『サンチマン―音楽と身振り―』

《メディア》はミュシャがサラ・ベルナール（1844-1923）のために描いた縦長の演劇ポスターの5作目。ギリシャの古典悲劇『メディア』を、詩人カチュール・マンデス（1841-1909）がサラのために書き下ろした演劇のために制作された。このポスターは、不貞を働いた夫イアソンへの復讐のため、メディアが愛する我が子を手に掛けた第3幕を描いたもの。彼女は血の滴る短剣を持ち、足元には子どもが2人横たわっている。メディアの左腕には、後にミュシャとジョルジュ・フーケ（1862-1957）が共同制作し、サラが舞台で身に付けた《蛇のブレスレットと指輪》のきっかけになった蛇が絡む。物語に蛇は登場しないことから、このモティーフは嫉妬の象徴とも、サラの十八番であったクレオパトラ役から着想を得たものであるともいわれる。

それまでの演劇史上、激情に身を任せて子殺しをするというショッキングな結末は、未開の部族の王女であるメディアの自制の無さや野蛮さの表れと解釈されがちであった。しかしマンデスは、不可侵の英雄とされたイアソンの自分勝手な振る舞いや裏切りを強調することにより、狂気を抱くメディアを等身大の女性として演出した点で注目された。メディアの感情が頂点に達した瞬間を印象的に切り取ったミュシャは、演劇の要点を明確に捉えていたといえる。青ざめ、目を見開いた表情は狂気を思わせるが、モデルにポーズを取らせスケッチした最初の段階では、悲劇の結末を憂うように伏し目で描かれていた。

この表情描写については、ミュシャが傾倒していた心霊研究の結果であると指摘されている。1890年代後半は、人間の霊的な側面に科学的にアプローチしようという研究が盛んになった頃であり、ミュシャもまた神秘学は合理的に研究が行われる科学となったと述べるなど、神秘的な現象の存在を確信していた。1899年頃にミュシャが撮影したとされる降霊術を行う霊媒ド・フェルクル夫人の連続写真のなかに、メディアと表情が類似した写真が残っている。これは、ミュシャがアルベール・ド・ロシャス（1837-1914）ら当時の心霊研究の第一人者とともにヴァル＝ド＝グラース通りのアトリエで毎週末に行っていた降霊術などの実験に際して撮影されたものと考えられる。1900年に出版されたド・ロシャス著『サンチマン―音楽と身振り―』にも、別の写真ではあるが同じくド・フェルクル夫人が目を見開いてポーズをとる写真が掲載されている。本書の目的は、「感覚・音楽と身振りの関係」を心霊研究の手法で探ることにあり、催眠状態下の人間にどのような身体表現が見られるのか霊媒やモデルを使って実験し、本の表紙画や挿絵を担当したミュシャがその様子を撮影した。これらの実験がいつからいつまで行われていたのか具体的な日付は判然としないものの、このアトリエに引っ越したのが1896年であることから、《メディア》の制作期間中にも実験が行われていた可能性がある。ミュシャは実験を通し不可視のものを知ろうとすると同時に、平常の状態にない人間の動きを観察することで紋切型のポーズや構図から脱却しようとしたとされる。狂気を思わせるメディアの描写も、制作中に見た、常軌を逸した霊媒の表情から何かしらのヒントを得たものと考えられる。（S.S）

アルフォンス・ミュシャ
メディア
1898年 リトグラフ、紙

アルフォンス・ミュシャ
『サンチマン―音楽と身振り―』より
1900年 書籍

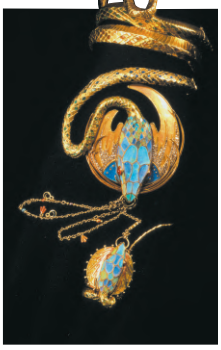
ミュシャ館インフォメーション

「生誕150年記念 アルフォンス・ミュシャ展」終了!

2010年4月に岩手県立美術館から始まり、全国6都市を巡回した「生誕150年記念 アルフォンス・ミュシャ展」が2011年6月、金沢21世紀美術館にて好評のうちに閉幕しました。堺市からは前後期合わせて約200点の作品を出展し、多くのお客様にミュシャの作品を楽しんでいただくことが出来ました。ミュシャの生涯にわたる数々の出展作品のなかには、チェコやフランスの美術館などから出品された普段なかなか見ることの出来ない作品もあり、貴重な展覧会となりました。（M.S.）

堺市所蔵の《蛇のブレスレットと指輪》がドイツで公開!

ミュシャがサラ・ベルナールのためにジョルジュ・フーケと共同制作した《蛇のブレスレットと指輪》が、ドイツ連邦共和国のプフォルツハイム宝飾博物館の開館50周年記念特別展「Serpentina（サーペンチナ）―世界の宝飾品における蛇」（会期：2011年11月26日 －2012年2月26日）で展示されました。蛇をモティーフとした宝飾品が約120点出展されたなかで、本作はアール・ヌーヴォーを代表とする一点として紹介され、注目を集めました。（M.S.）


アルフォンス・ミュシャ
蛇のブレスレットと指輪
1899年
金、エナメル、オパール、ルビー、ダイヤモンド

堺市立文化館 アルフォンス・ミュシャ館

観覧料	一般 500円	高校・大学生 300円	小・中学生 100円

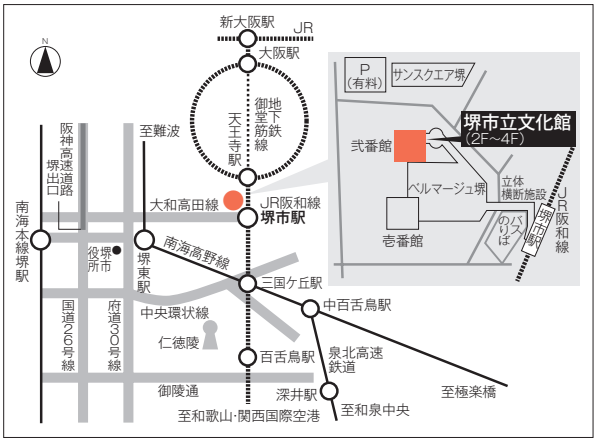
＊小学生未満・65歳以上・障害者手帳をお持ちの方は無料
＊20人以上100人未満の団体は2割引　＊与謝野晶子文芸館もご覧いただけます。

開館時間　9時30分―17時15分（入館は16時30分まで）

休館日　月曜日（休日の場合は開館）、休日の翌日（翌日が土・日・休日の場合は開館）
年末年始、展示替期間

交通　JR阪和線「堺市」駅下車徒歩約3分
JR快速にて・大阪から約25分・和歌山から約50分・天王寺から約8分・関西国際空港から約45分

590-0014 大阪府堺市堺区田出井町1-2-200 ベルマージュ堺弐番館
TEL:072-222-5533　FAX:072-222-6833
http://www.sakai-bunshin.com/mucha.php



発行日＝2012年3月9日　発行＝堺市立文化館 アルフォンス・ミュシャ館　執筆・編集＝作花麻帆（M.S.）、新谷式子（S.S.）　印刷＝株式会社 松岡印刷所